

JET からの手紙

国際交流員としての5年間 ～新しいチャレンジに向けて～

宮崎県延岡市国際交流推進室

Carina Bublies (ブブリス カリナ)

はじめに

新型コロナウイルス感染症による日本の入国制限などにより、任期終了の予定となっていた JET 参加者が 2020 年は特例再任用できるようになったことで、今年の 8 月から私の国際交流員としての 6 年目がはじまります。「同じ仕事を長く続けるのはつまらない？」と先輩や友達から聞かれたこともあります。振り返れば 5 年間の間に私の仕事内容が少しずつ変わり、新しいチャレンジを今でもしています。

延岡市に来たばかりの私

5 年前、2016 年 8 月の暑い日、初めて宮崎県の延岡市役所に出勤しました。配置先は総務課内にある国際交流推進室でした。国際交流の担当職員のほか、周りの職員の方は国際交流と全く関係がない仕事をしている部署で、仕事に話す機会もあまりありませんでした。最初は何をすればいいかわからず、定時に帰るまで前任者の資料を見たり、担当者と相談したりして過ごしました。開催したいと考えたドイツ語講座やイベントの内容をワード資料としてまとめ、担当職員は私の代わりに上司の決裁をとり、パソコンや会場の予約をして、当日は公用車で会場まで送ってくれました。最初の数か月は役に立つどころか担当職員の負担を増やしてしまいました。

まずは仕事に慣れること

市役所での仕事が始まった時は新規職員と同じように、分からないことが多くありました。CLAIR および宮崎県による JET 参加者研修がありましたが、県内でも国際交流員の業務内容はそれぞれの配置先で違いがあります。

例えば、研修で学校訪問に関することを詳しく学びましたが、実際、1 年目に私は一度も学校訪問をしませんでした。一方で、起案の決裁の取り方や使える予算の金額など、延岡市役所独特のルールに関する説明は研修では学ぶことがありませんでしたが、さまざまな国際交流イベントを企画することで必要となりました。1 年目は事務的なことを全て担当職員がしてくれたおかげで、イベント開催や国際交流ニュースレターの作成、ホストタウン事業に関する翻訳・通訳などに集中することができ、少しずつ国際交流員としての仕事に慣れたこともあり、再任用の希望を出しました。



ドイツ風給食が小学校で登場

自分でできることは自分で

少しずつ仕事に慣れてくるにつれ、新しいこともできるようになりたいと思い始めました。当時は総務課内の職員数も少なく、特に忙しい時期でした。自分でできることを自分ですれば、担当職員の負担が減り、よりスムーズに国際交流の仕事ができると思いました。ただし、実際は簡単ではなく、自分にとって仕事の悩みが一番多い時期が始まりました。国際交流員として応募した際には、仕事の面接を受け、日本の自治体に配属されたら、任用期間内は日本人職員と同じように働くことになるとは思いましたが、実際は職員との違いを強く感じました。例えばイベント用のパソコンを自分で予約したいと思っても、予約は職員が使っているシステム内ではできないと知りまし

た。また、ホストタウン関係で作った翻訳を担当課に送りたいと思った時、庁内メールシステムが使えなかったのが、代わりに担当職員が送る必要がありました。簡単なことでも、担当職員が離席している時には、自分ですることができませんでした。仕事がそのまま制限されたら、上達できずにつまらなくなると感じました。毎回担当職員に頼むことも辛くなって、状況が変わらなければ再任用しないほうが良いのではないかと悩んでいました。



ホストタウンイベントでの通訳・
担当したホストタウンフレーム切手の紹介

結局、担当職員をはじめ、室長と何度も相談し、3年目に室長の許可を得て、職員が使っている同じシステムにログインできるようになりました。当時の新規職員の研修に参加し、新しく使い方を学びました。自分で起案をしたり、ほかの課にデータを送ったり、全職員にイベントの案内を通知したりすることができ、仕事がまた面白くなりました。例えば 2020 年には Instagram ページ (@nobeoka_international) の開設に向けて、運用規程やマニュアルを作成し、ほかの自治体の Instagram を参考として調べ、3つの関係課にも確認してもらい起案文書を作る経験もしました。

私にとって6年目の再任用更新を決断する1番の理由になったのは2017年から毎年12月に開催しているイベント「ドイツクリスマスマーケット in 延岡」です。延岡市に来たばかりの時から、ドイツ風のクリスマスマーケットを開催したいという夢がありました。思い描くようなイベントを開催するには、国際交流員として継続的に業務にあたる必要があると感じました。最初は市民活動団体と協力し、参加者500人ぐらいの小さいイベントとして開催しましたが、少しずつ来場者が増えました。2020年はコロナ渦の中の開催に向けて、実行委員会を立ち上げ、委員長として予算の管理や出展者・出演者の募集や対応、関係業者との協議、チラシの依頼、スタッフ用のマスクのデザインなど、責任を感じながらもイベントを担当しました。国際交流員として警



ドイツクリスマスマーケット in 延岡

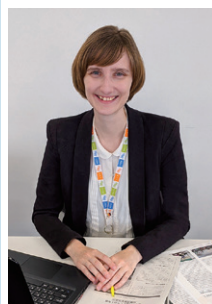
察署に提出する道路使用許可書を書くことになるとは、1年目は考えられませんでした。イベントには約2,000人が来場し、無事終わりましたが、コロナ対策によりできないこともありました。改めてもう一度イベントを担当したいという思いが再任用を後押ししました。

新しいチャレンジ

今年度から、私は総務課内で3番目に在籍年数が長い職員になりました。庁内の知り合いも増え、イベントなどの相談をするとき、それぞれの担当課に声をかけやすくなりました。そして、4月から国際交流をサポートするため、日本人職員が着任され、面接も経験でき、今は日本語で後輩に庁内のやり方を教えることが私の新しいチャレンジになりました。

配置先により、国際交流員と担当職員の業務の役割が違いますが、興味を持っている国際交流員を少しずつ新入職員と同じように育てていくと、数年間でも上達しながら楽しく仕事できると思います。

プロフィール



Carina Bublies
(ブリス カリナ)

ドイツ、アウグスブルク市出身。ミュンヘン大学で日本学を専攻し、1年間日本へ留学、2016年に卒業。修士論文は「ドイツと日本の姉妹都市交流」地元の独日協会では若者向けイベント企画などの活動を行った。



延岡市の国際交流生活を紹介する Facebook ページの QR コード